

1. 近世小袖の模様配置の特色は総模様から次第に裾におりていって、一時表面より没して袖口、フキ、裏にまわり、再び表面にあらわれて褙模様を形成した。裏模様は表面よりその模様を没し去った時期で、その流行は老中田沼暗黒政治から寛政改革にいたるその中間期に属する。幕政は地におち金力に恵まれた町人はその力にまかせて目新しさを求めることに腐心した時期でもあった。この模様の特色は幕府の法度という厳命にあらうことなくして生まれたことにある。その意味からその発生、流行、普及について考察してみた。

2. 賤のおだ巻、反古染その他いろいろの文献類と最近所蔵することとなった旧豪商北町三井家の遺品の中に優品が数領発見され、あわせて年代を同じうする南紀徳川家旧蔵の遺品を中心として調査を行なった。

3. 江戸幕府の町人に対する服飾制限は天和以降年を追ってきびしくなったが、それは表向だけのものであった。享保改革の服飾制限は隠し裏をあみださせ、帯の発達とともに裾模様、裏模様を生んだ。隠し裏を利用した武家風のものが紀州家のそれであり、町人の隠し裏は裏模様となって刺繍加工に莫大なる費用を投じた。表面を地味にして裏を華やかにすること贅のきわみであり、これが金持から一般町人へと普及して寛政改革前の服飾界を賑わした。